

令和7年度 矢田中学校中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【＝Computer Based Testing】とする）で実施。

学年		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)			平均IRTスコア
実施月日			国語	数学	国語	数学		理科
3 年	学校	52	41	32	14.6	21.5	学校	434
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2	大阪市	489
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6	全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3 年	学校	43	58.7	49.6	40.9	32.0	40.2	9.2	10.0	19.2	20.2	14.0
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
9月2日	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※ 3年生の理科はB問題を選択

令和7年度 矢田中学校中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

●全国学力・学習状況調査

【成果と課題】

全体の平均正答率を全国平均と比べると、国語は13.3ポイント、数学は16.3ポイント下回った。また、理科では平均IRスコアで69ポイント下回った。また平均無解答率は国語で10.9ポイント、数学で7.9、理科では1.9ポイント上回っており、課題となっている。教科ごとの結果は以下の通りである。

【国語】

平均正答率はそれぞれ「話すこと・聞くこと」、「書くこと」においては15ポイント以上、「読むこと」においては14ポイント程度全国平均より下回っている。これについて国語の授業だけでなく日常生活の中で新聞を読んだり読書の習慣を身につけると共に読んだものについての感想や趣旨をまとめ、グループでコミュニケーションを図る習慣を身につける必要がある。また、無解答率の高い問題としても周りとの会話を通し、自分の考えをまとめたり、そのまとめた考えを文章化することがなかなか難しいようである。様々な社会現象などに興味を持ち、自分の考えをまとめ発表する機会をより充実させていく。

【数学】

平均正答率はそれぞれ「数と式」においては20ポイント、「図形」においては10.9ポイント、「関数」においては16.8ポイント、「データの活用」においては15.7ポイント全国平均より下回っている。特に「数と式」においては20ポイント全国平均と開きがあり、これについては基本的な計算の手順の確認や文字式を使った計算や文字の意味についてもしっかりと再確認する必要がある。さらに、基本的な数学の考え方を文字などを使って一般化して説明する力を身につけることも大切である。「図形」や「関数」の領域においても基礎的な内容の意味を理解して練習問題等に取り組み内容の定着を図る必要がある。その上でいろいろな現象を数学的にとらえる応用問題にも取り組むことが大切である。他の3領域に比べて「データの活用」の領域については基本的な考え方は定着してきて、より練習にはげれば抽象的な問題にも取り組んでいけるようになると思われる。

【理科】

どの領域の問題も平均正答率に比べて下回っている。基礎基本の知識をしっかりと身につけるとともに色々な自然現象を理科的な見方をで考える工夫を行う。

【今後に向けて】

基礎的、基本的な計算力や知識の定着を図るとともに、予習や復習の家庭学習を習慣化する必要がある。また、問題の内容や量によっては考えることをあきらめてしまう傾向が強いので粘り強く考える力をつける必要がある。そのためにもスモールステップを活用し、簡単な内容から少しずつ難易度を上げて反復練習をするとともに学習内容に興味・関心を持たせるような課題の精選を行い、自ら学ぶ意欲を育てていきたい。さらに、グループ学習などを通し、他の人の意見を聞き、それを参考にして自分の意見を考え、まとめ、発表する力を身につけていきたい。

●中学生チャレンジテスト(3年生)

<成果>

平均点は大阪府と比較して、5教科トータルで82%。国語では91%、社会では96%、数学76%、理科66%、英語75%という結果となった。社会、国語では大阪府平均に対して9割以上に到達しているが、理科は7割に到達していない。府の平均に近い教科もあり、努力の跡がみられる。

<課題>

各教科においてばらつきがあるものの府平均の3割未満の生徒が10%を超える教科が多いことが分かった。基礎・基本事項が定着できていない状況で3年生の内容を一斉指導で進めることが厳しいと考えられる。

【今後に向けて】

各教科において、過去問題や類似問題などの取り組みと、基礎・基本の定着を図り生徒の学力向上を図る。生徒の学習状況に適した指導方法を進める。